

資 料

仲間との相互作用が生み出す学習内容理解の深まり

杉 江 修 治
松 本 泰 介
稲 田 清 美
川 口 尚 子
山 本 優 子

1 問題

教科学習において、学習集団の成員相互の学び合いを導入する試みが近年増してきている。児童生徒が生言葉で伝え合い、聞き取り合い、理解し合うというその過程は、テストの答案用紙に解答するための知識の習得ではなく、生きて働く学力形成に有効と考えられているためである。ただ、教師の経験のみに頼った学び合いの手法によるのではなく、協同学習の理論を踏まえた学び合いの実践が普及してきているかといえ、まだ十分というには程遠い実態もある。

本研究では、学び合いを授業過程に導入することで、実際にどのような変化が得られたか、小学校国語の授業事例で得た成果を報告する。

児童生徒の相互作用を通じた学びの成果の研究は、集団学習、集団思考の研究としてこれまでも重ねられてきた（杉江 1999）。ただ、その成果を検討するためには、急造のグループを用いた検討では十分とは言えない。グループが課題解決志向的な学習集団としての成長を経ていることが必要な条件だからである。

ここで検討の対象とした児童は、協同学習の原理を踏まえて4年間の実践を重ねてきた小学校で学ぶ6年生たちである。彼らは共に学び、共に育つという学習文化の中で日常を過ごしている。教師集団のつながりも強く、その実践を広く発信している実践校である（名張市立つつじが丘小学校 2009）。

本研究で扱った題材は、国語科で、説明文を読み、その内容を的確に表すキャッチコピーを案出し、ポスターを作ろうという目標の達成を図るものである。社会的アピールを内容とする教材

の文章を読み取った結果を、キャッチコピーの形であらわすことで、児童の読み取りの評価はよりの確になされるはずである。児童のそれぞれの読み取りに関する情報として、教師にとっては成果がより具体的に理解できると考えられるのである。また、ポスター制作という課題は、学びを外に発信するという機能を持っており、学習者の意欲を喚起する工夫として意義あるものである。

全12時間で構成される単元であるが、その計画立案は6年生の担任4名の協力でなされた。この学校では、一つ一つの教材について、それ自体を教えるという立場から、その教材を通してどのような力を児童につけていくのかという観点で授業設計がなされてきている。教師集団の衆知を集めた試みは、子どもの主体的な学習の構えの形成につながっている。

この研究では、特に、キャッチコピーの内容が、相互作用を通してどのように変化したかを取り上げて検討する。児童間の相互作用は、単なる形式的なやり取りに終始するならば、個々の児童の考えに変化をもたらすことはない。一緒に学ぶ仲間の意見を認め合い、互いに高め合いたいという、協同の原理が貫徹された学習集団であれば、相互の支援は素直に取り入れられ、高い成果に発展するはずである。

結果は、個人で考えたキャッチコピーが、相手を変えた複数回のペアでの話し合いを経て、どのように変化したか、そしてその変化は何によるものと本人が考えたかという資料で示す。

2 方法

(1) 資料の収集

12時間で構成する単元の9時間目に、児童はキャッチコピーを個別に作り、ペアによる交流を、相手を変えて複数回持ち、それを踏まえて個別に修正をする。そこでの、最初の案と、交流後の案を比較し、その変化の質を検討する。

また、児童には、どのような情報を元にキャッチコピーの表現を変えたのか、その理由を書かせた。

(2) 教材と単元の基本構想

1) 単元名

生き物の素晴らしさを考えよう 「キャッチコピーつきポスター」を作ろう (教科書：光村図書)

2) 目標

この学校では、6年生の国語科において「つきたい力」として、次の3点を掲げた。

章全体の構成を理解し、自分の考えを明確にするとともに、その内容や表現方法について吟味することができる。(評価力・判断力)

筆者の意図や文章の展開に対して、自分なりの考えを持つことができる。(思考力・発想力)

理解したことをもとに、自分らしい方法で簡潔に伝えることができる。(表現力・論理力)

ここで扱う教材に即して、～の目標を、この単元では次の形に具体化した。

文章中から正確に情報を取り出し、文章全体の構成や内容・要旨をつかんで読む。

生き物の3つのつながりの様相をまとめ、自分自身のつながりについても考え、文章を書く。

表現の効果を工夫して、生き物の素晴らしさを訴えるポスターを作り、伝える。

3) 教材について

身のまわりにはたくさんの機械製品があり、より速く、より正確に、より手軽にと、生活の様々なことがらが動いている。そのような環境で育ってきた子どもたちがいる。そこで子どもたちに本教材を使って、人間と機械との違いは何か、人間らしい生き方とはなにかを考える学習をさせたいと考えた。

生き物の特徴をただ一般論的に解明するのではなく、ロボットのイヌと本物のイヌとを比較しながら解明している点が、本教材の特色の一つである。文章構成は「問題提起」「問題の追求・事例」「まとめ・筆者の考え」と分かりやすく、最終段落では、「まとめ」に加えて「筆者の考え」が明確に示されているところに大きな特徴がある。したがって、子どもたちが筆者の考えに対して、自分の意見を表明するという学習に適している。

そこでこの単元では、文章の構成を踏まえて大きく3次に分けて学習を進める。

まず第1次では「情報の取り出し」としてキーセンテンスで読み取りを進め、文章の構成を意識しながら、筆者の考えを要約する活動を取り入れる。

その上で、第2次では、サブテキストの読解を取り入れる。筆者は、「生き物の特徴」として、「外の世界とのつながり」「一つの個体としてのつながり」「長い時間の中で過去の生き物たちとのつながり」というように、さまざまなつながりの中で生きていることをあげている。そのことをしっかりと押さえた上で、「長い時間の中で過去の生き物たちとつながる」ことについては、相田みつをの詩「自分の番」をサブテキストとして活用する。この詩の読解を通して、子どもたちに過去の祖先とのつながりをより実感させ、命のつながりの尊さを考えさせる。

最後に、第3次では教科書の文章やサブテキストの読解を通して、子どもたちが感じたことを自分の考えとして文章に表し、その中でも特に強く感じた自分の思いを短いキャッチコピーで表

現させ、簡単なポスターにする活動を取り入れる。これらの活動により、自分の考えたことを効果的に組み立て、簡潔に要約して効果的に表現する力がつくと考えた。ポスターを作る際には、文字の工夫、絵の工夫、レイアウトの工夫など、多様な選択肢が考えられる。そのため、子どもたち自身得意な力を発揮して、周りの友だちに表現することができる。このことは、子どもたちの書く意欲をさらに高めると考える。また、学習の最終ゴールとして5年生に向けて成果を発信する場面を設定する。

表1 指導計画と評価計画 (全12時間)

次	目標	時数	学習課題	評価
1次 5時間	学習のめあてと流れをつかむことができる。 文章中から正確に情報を取り出し、文章全体の構成や内容・要旨をつかめる。	1	・単元表にそって単元全体の見通しを持ち、新出漢字・語句の学習をしよう。	学習の見通しを持てる。 (関心・意欲・態度) 情報の取り出しができる。 (読む)
		1	・生き物の特徴1を読み取り、キーセンテンス(要点)を探してまとめよう。	
		1	・生き物の特徴2を読み取り、キーセンテンス(要点)を探してまとめよう。	
		1	・生き物の特徴3を読み取り、キーセンテンス(要点)を探してまとめよう。	
		1	・筆者の考えに対して、自分なりの考えをまとめよう。	
2次 3時間	理由を明確にし、自分の考えを相手に伝えられる。 相手の考えを聞くことにより、自分の考えを見直せる。	1	・相田みつをの詩「自分の番」を読み、感じたことを伝え合い深めよう。	理由を明確にして、自分なりの考えを持ち、伝え合い深められる。(読む・話す・聞く・書く)
		1	・いのちについて関連した本を読み、生き物のいのちのすばらしさについて、自分自身の考えを書こう。	
		1	・「生き物のいのちのすばらしさ」について書いた自分自身の考えを、理由をはっきりさせて伝え合い、深めよう。	
3次 4時間	単元を通して、自分の考えや体験と結びつけて考えることができ、それを表現し深め合える。 学習全体の振り返りができる。	1	・これまで学習してきたことをもとにして、生き物のすばらしさを訴えるキャッチコピーを考え、ペアで伝え合いアドバイスをし合おう。	相手の考えを受け入れ、さらに自分の考えを深められる。(話す・聞く) 単元を通して、生き物のすばらしさについて考え、ポスターを作ることができる。(読む・書く) 書いたことをもとにして、表現し合える。(話す・聞く) 学習全体のふりかえりができる。(関心・意欲・態度)
		1	・友だちのアドバイスをもとにして、生き物のすばらしさを訴えるキャッチコピーつきポスターを作ろう。	
		1	・ポスターを5年生に見せ、制作意図を伝えながら、生き物のすばらしさを発信しよう。	
		1	・単元表を見直して、学習全体の振り返りをしよう。	

4) 児童について

各組 25 名程度で編成する学年である。学年やクラスの様々な活動を通じて、少しずつ全体で高まろうとする児童の姿が増えてきた。しかし、自分の考えを仲間に発信していくことや、それを受け取り、返していくことは、まだまだ弱い面がある。そこで各教科において、ペアやグループ、全体学習など伝え合う場面を多く設定してきた。

また国語科では、児童は、5年生での「サクラソウとトラマルハナバチ」、「千年の釘にいとむ」、「大造じいさんとガン」、「わらぐつの中の神様」などの学習を通して、少しずつではあるが「PISA 型読解力」の観点を取り入れた学習を進めてきた。その際には、文章中に書かれていることを読み取り、要旨をとらえること、筆者の考えに対する自分の意見を持つこと、登場人物の人柄について考え、行動の理由を自分なりに推論することなどを経験してきている。その際には、書かれている文章を根拠にして表現する仕方を学習してきている。

しかし、自分なりの意見を持って発表することが難しい児童の姿も見られる。また、自分なりの意見を持ち、発表し合うことは少しずつできるようになってきたものの、憶測や主観、好き嫌いなど、不確かな根拠で意見を述べる児童も少なくない。また、人の話を正しく理解しながら、穏やかに話し合っ、お互いに歩み寄って問題を解決したり、冷静に自分の意見を主張したりすることも難しい。全体的に「PISA 型読解力」で問題とされる、内容を理解した上で、文章や自分の経験を根拠にして自分なりの意見を表現するという力は弱い。

この単元では、サブテキストとして使用する「詩」の読解を通して、筆者の主張を自分の生活に引き寄せて考えられるようにし、実感を持って自分の考えを表現する活動につなげさせようと試みた。またそのことを通して、自分の意見を伝え合う力をさらに高めることを図った。

5) 2 次 第 3 時の指導案

キャッチコピーを作り合う 3 次 第 1 時の授業の 1 時間前の授業の流れを次に示しておく。次時の指導案とも共通する授業づくりの原理がそこにある。

「本時の目当てを知る」では、下の枠の中にあるような表現で本時の課題を示す。そこでは本時の学習のゴールが、子どもの側からも明確に理解できる表現になるよう工夫がなされている。

「学習の手順を確かめる」という留意点は、本時の授業の流れを児童が理解できるように教師が概説しておくという手続きをさす。学びの道筋を教師だけでなく、児童も知っておくことで、見通しを持った学習活動が可能になるためである。

「個人」「ペア（グループ）」「全体」といった学習形態の組み合わせは、内容に即して柔軟に組み合わせられている。ただ、ペア、全体といった交流の前に個人による取り組みを先行させ、一人ひとりが話し合いのための資源を持って参加できるよう準備をさせている点は共通している。

「ペア」活動の目標が児童に分かる形で示されている。単に「話し合いなさい」といった漠然

とした指示をするのではなく、ペアでどのような成果を出すべきかの指示が明確になされているのである。

「振り返り」の時間をきちんと取っている。振り返りのポイントは本時の課題にどこまで迫れたかであり、本時の課題の表現をほぼそのまま用いて自己評価させている。なお、3次第1時では、学び合いそのものへの振り返りもさせている。集団活動改善の手続き（ジョンソン他 1998）として有効な工夫である。

本時の目標

- ・自分の考えを明確にし、文章や自分の経験をもとに理由をあげて思いを伝えることができる。
- ・相手の意図を考えながら聞き、自分の考えと比較することで、思いを仲間に伝えることができる。

本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
5分 一斉	1 本時のめあてを知る。	・学習の手順を確かめる。	
学習課題「生き物のいのちのすばらしさ」について書いた自分自身の考えを、理由をはっきりさせて伝え合い、深めよう。			
2分 個人	2 個人の考えや理由を再確認する。	・自分の考えをもう一度整理させ、どのように発表するかを考えさせる。	・自分の考えを整理して、理由を明確にすることができたか。
5分 ペア	3 個人の考えをペアで発表し合い、自分の考えと比べる。	・自分がそう考えた理由を、はっきり伝えるようにさせる。 ・考えの似ているところ、違うところを意識させる。	・ペアで自分の考えを伝えることができたか。
30分 全体	4 個人の考えを発表する。	・友だちの意見を聞き、自分の考えと比較することで、思いを伝えるようにさせる。 ・友だちの考えに、質問することや意見を出すことで、考えを深めさせる。 ・意見交流する中で、考えの理由を言うようにさせる。	・自分の考えと比較し、伝え返すことができたか。 ・自分の考えを伝え、友だちの意見に伝え返すことができたか。
「生き物のいのちのすばらしさ」について書いた自分自身の考えを、理由をはっきりさせて伝え合い、深めることができる。			
3分 個人	5 振り返り	・今日の学習を振り返り、次時の学習に生かすようにさせる。	

授業評価の視点

- ・自分の考えや経験をもとに、理由をあげて自分の思いを伝えることができたか。
- ・仲間の発言の良さを見つけて自分の考えを深めることができたか。

6) 3次第1時の指導案

次に、キャッチコピーづくりへの取り組みをした3次第1時の指導案を示す。児童が取り組むべき課題は「自分が考えたキャッチコピーと友だちが考えたキャッチコピーを比べ、自慢できるキャッチコピーにしよう」である。

目標

- ・自分が考えたキャッチコピーと友だちが考えたキャッチコピーを比べ、アドバイスをもらうことで、自慢できるキャッチコピーを作ることができる。
- ・相手の意図を考えながら聞き、自分の考えと比較することで、自分の考えを相手に伝えることができる。

本時の展開

時間・形態	学習活動	指導上の留意点	評価の視点
5分 一斉	1 本時のめあてを知る。	・学習の手順を確認する。	
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: 80%;"> 自分が考えたキャッチコピーと友だちが考えたキャッチコピーを比べ、自慢できるキャッチコピーにしよう。 </div>			
22分 ペア (7分×3ペア)	2 自分の「生き物のすばらしさ」を訴える作文から相手にキャッチコピーを考えてもらい、自分が考えたものとは比べ、どんなキャッチコピーがよいか話し合う。	・相手の作文を読み、相手のキャッチコピーを考えることで、相手が自信を持てるようにする。 ・7分間でふたり分のキャッチコピーを考えさせる。 ・3人からアドバイスをもらえるように、ペアを3回交代させる。	・相手の意図を考えながら、相手のキャッチコピーを考えることができたか。 ・自分のキャッチコピーを相手が考えてくれたキャッチコピーにより、よいものにしようとしているか。
3分 個人	3 自慢できるキャッチコピーに修正する。	・友だちからもらったアドバイスをもとに、自慢できるキャッチコピーに修正させる。	
10分 一斉	4 修正したキャッチコピーを発表し合う。	・友だちの意見を聞き、自分の考えと比較することで、思いを伝えるようにさせる。 ・生き物のすばらしさを再確認させる。	・自分の考えを伝え、友だちの意見に伝え返すことができたか。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px auto; width: 80%;"> 自慢できるキャッチコピーを作ることができたか。 </div>			
5分 個人	6 振り返りをする。	・友だちのおかげでよかったことを中心に書く。	・友だちがいたから自分が高まったという思いが持てたか。

授業評価の視点

- ・お互いに、相手が自慢できるキャッチコピーにするためのアドバイスをし、それを生かしたキャッチコピーを作ることができたか。

- ・友だちがいたから自分が高まったという思いを持つことができたか。

3 児童の学習結果と考察

(1) キャッチコピーの変化

交流前と交流後のキャッチコピーの変化を、変化の経緯に関する児童の記述も付けて個別に表2に示す。

表2 キャッチコピーの変化とその経緯

児童	事前のコピー	事後のコピー	変化の経緯
1 HM	生き物のつながり	終わらせない 光り輝いている命のバトン	IKさんは、「終わらせてはいけない命のバトン」という意見を出してくれて、NMさんは、「光り輝いている命のバトン」という意見を出してくれた。だから、それらを合わせて、「終わらせない光り輝いている命のバトン」という意見にした。
2 YK	命は時間 大切に	先祖の人から受け継がれてきた時間を大切に	最初は、「命は時間 大切に」にしていたけど、ANさんが先祖の人から、という文をつけたほうがいいと言ってくれたからわかりやすいと思った。
3 SN	生き物はいろんなつながりを持っている	先祖が自分を生んでくれたから自分は生きている	KT君の「祖先がいたから自分がある」と、TT君の「生き物にだけの特徴がある」と、MKさんの「先祖からの命のバトンを受けついでいる」というキャッチコピーと自分の考えたキャッチコピーを合わせて考えていたら、いちばんいいと思ったので変えました。
4 NM	生き物ってなんだろう？	受けつがれている命のバトン	YY君とKDさんとHM君が「命のバトン」という言葉を入れたほうがいいと、アドバイスをしてくれたのと、HM君と自分の「受けつがれている」を合わせて、このキャッチコピーにしました。
5 CR	自分たちが今、ここに生きている	命をありがとう	ANちゃんの「ありがとう！千二十四人！」という意見と、SY君の「つながっている命」の意見がいいなと思ったから、「命をありがとう」に変えました。
6 HN	今も命はまわっている	かぞえきれない命の中で 今 生きている	MKちゃんの「命があるから生きている」という考えと、「かぞえきれない命の中でいいよね」というアドバイスをもらったから、「そんなとこまで……すごい！」と思って、自分の「今も命は回っている」というキャッチコピーとMKちゃんのアドバイスを合わせて、「かぞえきれない命の中で、今、生きている」というキャッチコピーに直しました。

7 MK	自分に今、いのちのバトンが回ってきている	かぞえきれないほどのいのちの中で、いのちのバトンがまわっている	HNさんと話したときに、かぞえきれないほどのいのちの中でいのちのバトンがまわっているというのをふたり決めて、つけたすのにあうと思ったから変えました。
8 KT	生き物はつながりの中で生きている	生き物はかけがえのない存在	SNさんに「どんな生き物でもかけがえのない存在」といわれて、そのほうが短いから変えた。
9 YY	命はすごく大切	命はすごく大切	ぼくは、キャッチコピーは変えていません。なぜかという、みんなから考えてもらったやつは、めちゃめちゃいいキャッチコピーだったけど、ぼくのもいいやつと思ったし、ぼくは命ってめっちゃ大切だから、ぼくは「命はすごく大切」にしました。
10 DC	命は、先祖からずっとつながっている	生き物は外の世界とつながり、長い時間の中で過去の生き物とつながり続ける	ペアで言い合っているときに、CYちゃんに、「命は外の世界……」というようにアドバイスをもらった。
11 RT	生き物はつながりの中で生きている	回さないといけない命のバトン	3人のみんなに読んでもらって、YIさんが「命のバトン」と言ってくれて、HYさんが「命のバトンを回さないといけない」と言ってくれて、KTさんが「生き物はつながりの中で生きている」と言ってくれて、YIさんとHYさんの意見がよかったので、「回さないといけない命のバトン」としました。
12 HY	光り輝いて多くの人とつながろう	光り輝く命 きせきのつながり	キャッチコピーなのに、文になるとおかしいし、3人と話し合ったのがいい言葉で短いからこれにしました。HNさんには「かけがえのない命」、RTさんには「きせきのつながり」、AKさんには、「光り輝く命とつながり」と考えてもらって、それを組み合わせて書きました。
13 CY	命のバトンがまわる	命のバトンを次の命に送る	MKちゃんが、命のバトンを今持っているから、次の命に送りたいといってくれて、そっちのほうがわしいし、わかりやすいし、キャッチコピーらしかったので、変えた。MKちゃんの言ってくれたキャッチコピーを短くした。
14 RK	生き物として生きることがすばらしいことだと思う	命のバトンはずっと受けついできたから、次にうけついで感謝されて生きていく	AKさんとYYくんは、命のバトンはずっと受けつがれてきたから大切と教えてくれた。それは、キャッチフレーズにしたらいいと思ったから変えました。
15 KD	いのちのバトン	受けつがれていく命のバトン 今、私が持っている	NMさんの「命のバトン 今、私を持っている」、IKさんの「受けつがれていく命のバトン」がすごくいいなと思ったので、合体させました。
16 HA	受けつがれてきた命のバトン	つながりの中で受けついできた命のバトン	最初に書いていたキャッチコピーより、「つながりの中で」をいれたほうがわしいから。TGく

			んに「過去と未来とのつながり」と言ってもらい、その「つながり」だけをとったらいいと思ったから、つながりの中で受けついできた命のバトンにしました。
17 AN	つながっている命	つながっている命のバトン	最初は「つながっている命」にしましたが、YKちゃんがアドバイスをしてくれて、命のことを書いたほうがいい。」と言ってくれて、なるほどと思って、二人で考えたキャッチコピーが「つながっている命のバトン」になりました。
18 IK	ひとりにひとつだけの命	ひとりにひとつの命の大切さ	「ひとりにひとつだけの命」だと、文末が単語で何が言いたいのかわかってもらえないし、交流をした人は、命の大切さを表した作文だったので、文末を「命の大切さ」として、「ひとりにひとつだけ」だと「だけ」がついているから、人生を短く感じるので、それを消したキャッチコピーにした。
19 RA	つながりの中で生きていく	先祖代々うけつがれていく命のバトン	CRさんとEJくんが、先祖代々うけつがれていく、がいいんじゃないと言ってくれて、CYさんやDCさんが、生き物は命のバトンをうけついでいく、と言ってくれたので、それをあわせて、先祖代々うけつがれていく、いのちのバトンとした。
20 TT	命は大切	生き物の命、大切に	SN君の言ってくれたアドバイスでよくわかったから、「命は大切」じゃなくて、「生き物の命、大切に」にしました。
21 YI	たくさんのつながり	たくさんのつながりの中で生きていく	AKちゃんが言ってくれた、「つながりの中で生きていくかけがえのない生き物」の、「つながりの中で生きていく」という言葉がすてきだと思って、自分の意見と合わせてこれにしました。
22 TG	うけつがれてきた命	大切にうけつがれてきた命	最初は、うけつがれてきた命だったけど、HA君が、大事にうけついで命って言ってくれたから、ぼくのとまぜて、大切にうけつがれてきた命に変えた。
23 SY	つながっている命	命のバトンをつなげて、守られ生きていく	とても感心したからと、その変えたところがいいと思ったし、EJくんが命のバトンを言ってくれたからいいと思った。
24 AK	生き物と時間のつながり	体を使って、心を交し合おう	YIちゃんからは「体を使って」、HYさんからは「心を交し合おう」という言葉をもらって、「体を使って心を交し合おう」にしました。
25 EJ	長い長い生命の歴史があったから生まれた	長い長い生命の歴史があったから生まれた大切な命	SY君が「大切な命」とつなげたらいいと思って、変えるほうがいいと思ったから。

ここでは、1名を除いた24名が交流を通してキャッチコピーを変化させている。

その変化を評価する客観的な基準があるわけではないが、よりよい変化と感じられるものが多くあるように思われる。

たとえば、より印象的、効果的、実感的な単語を加えたと受け取れるもの（児童1, 4, 11, 14, 17, 19, 23の「命のバトン」という表現の追加、児童6, 7, 「かぞえきれないいのち」という表現の追加など）、文の組立ての工夫をしたと受け取れるもの（児童1, 6, 15, 20の倒叙的表現、児童4, 12の平凡な投げかけ表現から体言止めへの変化）、言葉を加えることでの意味が明確になったもの（児童1, 4, 6, 13, 15, 17, 18, 21, 23など）といった事例をあげることができよう。

ただ、一方、助言に従うことでキャッチフレーズにしては長すぎたものも少数見られた。児童によってはもうワンステップの学習指導活動が必要な者もいたようであった。

(2) 相互影響の分布

表2の「変化の経緯」欄には、キャッチコピーの変化をもたらした仲間の名前があげられているが、その分布は広い。特定の児童に偏っていないのである。

児童は交流の折に3~4人の仲間と意見交流を行っている。その中で、影響を与えた者として具体的に名前をあげられている児童を数えると、誰からも名前をあげられなかった者は3名、一人の仲間から名前をあげられた者が8名、2人からあげられた者が14名、3人からあげられた者が2名であった（表3）。この結果は、児童たちが相互に十分影響を与え合っており、それは特定の児童に偏ったものではないことを示していると言えよう。

また、表2の「経緯」の具体的な記述を見るならば、変えた理由はそれぞれ「言われたから」ではなく、自分自身の中でとらえ返して変えたことをうかがわせる記述がほとんどである。仲間との交流が同調行動を助長するといった意見がしばしば言われる。しかし、そこに至るまでの学習活動が、個々に主体的になされている場合、そのような懸念は小さいのである。同調的な行動は、計画性のない集団活動ではそれを呼び起こすことがあり得るが、指導者の側の配慮が適切になされていれば、解消できる問題なのである。

表3 変化の経緯で名前をあげられた児童

名前のあがった回数	あげられた児童数
0	3
1	8
2	14
3	2

4 まとめ

実践を舞台にしたこの研究資料では、協同の経験を十分に持った児童による協同的な学習では、児童は相互の影響を能動的に受け止め、学習成果を自らより望ましい方向に変えて行けるという事例を示すことができた。

協同の学びの重要さが近年実践の場で自覚されて来、実際に授業で適用される事例も増えてきている。協同学習は、学習指導要領にあるような「自ら学ぶ意欲」をもち、教育基本法にあるような「民主的人格」を育てるといふ、学校教育の目指す目標の実現の原理として極めて重要な位置づけをもつものである。ただ、児童生徒の交流を図ることだけで、その原理が生きてくることはない。授業設計にあたって、常に緊張感を持つての工夫、配慮が必要なのである。

本研究の舞台となった名張市市立つつじが丘小学校では、協同の原理を教師集団が一体となって取り入れ、実践の工夫を重ねてきた。本報告の成果はほんの一端にすぎない。資料としてこのように明示できる側面以外にも、授業過程での児童の授業態度、学習意欲など、協同学習を実践に取り入れる以前と比較して大きな変化が生じてきているという評価を、周囲から受けてきている。このような学校の力量が、文化として定着していけるような学校づくりへの努力が現実的な大きな課題としてある。教えることが教育だという、日本全体を覆う根強い教育文化を振り返る資料のひとつとして、本報告の内容は生きるのではないかと考える。

文献

- ジョンソン D.W.・ジョンソン R.T.・ホルベック E.J. (杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤訳) 1998 学習の輪 アメリカの協同学習入門. 二瓶社. (Johnson, D. W., Johnson, R. T., & Holubec, E. J. 1990 Circles of learning: Cooperation in the classroom (3rd ed.). Interaction Book Company.)
- 名張市立つつじが丘小学校 2009 仲間と学び合う中で、ともに高まる子をめざして 「話す」「読む」「聞く」「書く」活動を通して (協同教育実践資料9) 日本協同教育学会
- 杉江修治 1999 バズ学習の研究 協同原理に基づく学習指導の理論と実践 風間書房